

Heroldo de HEL

N-ro 95 februaro - marto 2003

HOKKAJDA ESPERANTO-LIGO

北海道エスペラント連盟

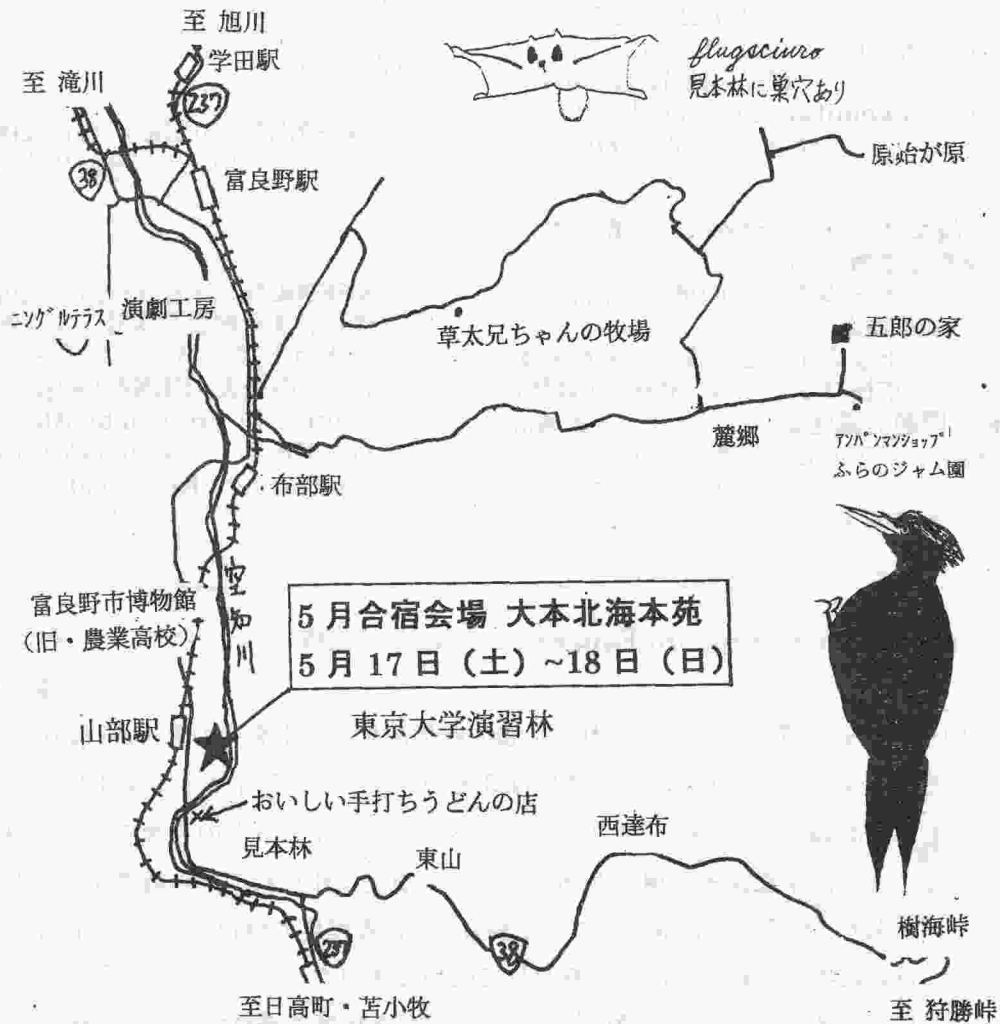
ĉe HOŝIDA Acuŝi

〒053-0844

Mijanomori 2-18-18, TOMAKOMAI

苫小牧市宮の森2丁目18-18 星田 淳 方

053-0844 JAPANIO



11:50 札幌駅前→(中央バス高速ふらの号)→14:41 富良野バス停→左へ歩くと駅
15:14 富良野駅→(JR 落合行き普通列車)→15:32 山部駅→正面に歩いてすぐ
進行表 (programo)は別紙のおしらせをご覧ください

ENHAVO

- 2 La jarkunveno de Sapporo-Esperanto-Societo (BABA Emiko)
- 3 Danke ricevitaĵoj (HOŠIDA Acuŝi)
- 4 Kiel novaĝas la HP (JOKOJAMA Hirojuki)
- 6 Mia lernado de fremdaj lingvoj (AMAGATA Yosihiko)
- 7 Azia Civiriza Organiza Forumo proponis al UN pri lingvaj rajtoj (trad. GOTOO Yosiharu)
- 8 Malmultenombraj popoloj de la Rusia Fora Oriento en la dialogo de kulturoj(2) (Valerij PARAVIN)
- 10 Habarovskaj pentristoj (Mihail KORČMARJOV)
- 12 Preĝo sub la verda standardo (L.L.ZAMENHOF)
- 14 Letero al mia fileto forinta (MIYAZAWA Naoto)
- 20 La 4a komitata kunsido de HEL (KABAYAMA Yūsuke)

目次

- 2 札幌エスペラント会総会 馬場 恵美子
- 3 受領郵便物 星田 淳
- 4 最近のホームページの更新の内容について 横山 裕之
- 6 アブハチ取らず・広く浅く 天方 良彦
- 7 アジア市民フォーラム、国連に「言語と人権」問題討議建議 訳：後藤 義治
- 8 極東ロシアの先住民族ウデゲ(2) ガレリ・パヴロフ
- 10 ハバロフスクの画家たち(2) ミル コルマリョフ

12 緑なる旗の下での祈り

ラザロ ルドヴィコザメンホフ

14 あるエスペランチストの手記 宮沢直人

20 第4回委員会HEL報告 樺山 裕介

Danke Ricevitaĵoj 受領郵便物

* SFERILO

SFERO

(San Francisco Esperanto Regional Organization)発行、2003.1.20 受信、2月例会予告号。毎号英語・エスペラント混在。今までこの機関誌は郵送で送っていたが、経費節減のため電子発信に切り替えた。つまりメールマガジンになったわけ。デザインは従来と同じ。NASK (かつてのサンフランシスコ夏期講座)は昨年より東部へ移ったが、今年も去年と同じVermonto州で7月7～25日の間行われる。

* SFERILO : SFERO 発行、2003.2.16 受信、3月例会予告号。2月例会はスペースシャトル・コロンビアの乗員を悼む黙祷で始まった。

* SFERILO : SFERO 発行、2003.3.24 受信、4月例会予告号。3月例会では「どうしてエスペランチストになったか」の発表。ELNA (米国の Landa Asocio) の prezidanto, Alex Shlafer は 1978 年、ソ連 Tomsk の図書館で Fundamenta Krestomatio を見て学ぶ気になったとのこと。

La jarkunveno de Sapporo-Esperanto-Societo 札幌エスペラント会総会

馬場 恵美子

2月8日かでの2・7で総会が行われた。まず昨年急死した小熊氏の黙祷が行われた。

つづいて会計報告・行事予定など。昨年は3名のエスペランチストが来札した。

g a s t o 会計報告では、ベジタリアンのエスペランチストとの会食で規定の料金内で済ませることが出来なかった報告があった。この規定は作られてから時間が経過し改正を求める声があり、総会で「食事を共にした場合、同行者程度の負担とする」に改正された。

例年秋に行われていた勉強会は、時期を見て改めて通知する。

また会員相互の報告を [s e s 通信] として、はがき程度で送付することが決まった。

担当は、中野常明。後藤義治。世界大会承知については横浜が内定したが、協力の依頼があれば応ずる用意があることを確認した。会長は後藤義治。GASTO 係りは金森美子。事務局は馬場恵美子。会計監査は児玉広夫となった。参加者 13 名

*Mejlŝtono 2003/1 N-ro 175. 仙台E会: B5X8頁のうちエスペラント文は合計1ページ。S-ro GOTOOの巻頭言はエスペラントの可能性の追求を暗示。

*NOVA VOJO: 2003. 1: N-ro381 januaro A5 X36頁中E文約6頁。大本エスペラント普及会(EPA) 発行。

*PONTETO: Januaro 2003 N-ro 197: 関東エスペラント連盟(ELK): B5 X 8頁のうちE文(エスペラント文) 3頁はユーロコインの紙上展示。

*La Tamtamo: 第342号(2003年1月, 横浜エスペラント会= JER), A4 X12頁, 日本語。総会(1月25日) 準備号。

*Eskalo 第99号(2003年第1号), 2003年1月29日, 川崎エスペラント会, B5X4頁, 日本語, 総会(1月12日) 報告。

*La Suno 79号, 山梨エスペラント会, 2003年1月30日発行。B5 X18頁のうちE文4頁。Informo de rusa popolo —— (NAKAZAWA Hirofumi) は、領土問題、モスクワの劇場テロなどについての文通。昨年来道した Valerij Paravinの文も。

*La Movado N-ro 624 feb. 2003, 関西エスペラント連盟(KLEG), B5 X20頁の内E文は計4頁。巻頭の Skize pri la movdo en Japanio 2002 は恒例の国内運動記録。「ランティの思想と21世紀」(タニヒロユキ) が連載開始。

*NOVA VOJO: 2003. 2: N-ro382 februaro A5 X36頁中E文約7頁。EPA発行。昨年日本大会に出席した A. Ionesovのサマルカンドの平和博物館の話、連載中。

*La Tamtamo: 第343号(2003年2月, JER), A4 X 6 頁, 日本語。読書会報告では Martaについて、その内容、文の美しさ、laの用法などの発表。

*Hokkaidō Rōmazi Kenkyū No.115 (復刊88) 北海道ローマ字研究会 Hs. 15n. 03 gt. 01n., 「受贈資料」にHeroldo de HEL 93-94号の紹介。OTAYORI に MUKAI Toyoaki san の文。1987年ごろまで新冠に住み、HEL会員だった。

*受講生通信 第87号, 2003-03-01, 沼津エスペラント会, B5X14 頁のうちE文2頁。初級終了の菅原路子さん(札幌市) は "Esperanto povos fari nin riĉa". 中級の伏見洋一さん(旭川市) は "la idealo de Zamenhof estas ankaŭ tiu de la tuta homaro" と、頼もしい。また天方良彦さん(旭川市) は「万年初心者からの脱出」、初級にも石橋慶子さん(札幌市)、新受講の赤堀麻衣子さん(帯広市) が diligentas!

Kune antaŭen !!!!

*センター通信: 2003年3月3日, N-ro 235, 名古屋エスペラントセンター発行, B5X18 頁のうちE文4頁。「戦争とエスペランチストたち—山田義」は、ベトナム戦争中のことをベトナム人が書いた手記を集めた Raportoj el Vjetnamio のことなど。

*NOVA VOJO: 2003. 3: N-ro383 marto, A5 X36頁中E文約7頁。EPA発行。

*La Movado N-ro 625 mar. 2003, KLEG, B5 X24頁の内E文3頁。「富良野で合宿」はHEL 5月合宿の予告。

*La Vulkano: N-ro 144, Printempo 2002 : HUKUOKA ESPERANTO-SOCIETO: B5 X 8 頁中E. 文1頁。昨年札幌にも来たドイツの Frank Stephan の案内記「フランクさんとの楽しかった日々—木下尚美」によると、彼は来年も北海道に来るとか。

最近のホームページの更新状況の内容について

84 2003.2.16 アイヌ語新聞への投稿記事「ユニコード」 - 横山裕之

アイヌ語新聞への投稿記事「エント (ナギナタコウジュ)」 - 横山裕之

アイヌ語新聞への投稿記事「ソコニ (エゾニワトコ)」 - 横山裕之

アイヌ語新聞への投稿記事「ラウラウ (コウライテンナンショウ)」 - 横山裕之

アイヌ語のみの新聞「アイヌタイムズ」の第20号から第23号までの投稿記事を載せました。アイヌ語原文・日本語の他に、アイヌ語原文・エスペラント訳もあります。

「ユニコード」とは、国際的な文字コードのことで、これに文字に該当するコードが登録されると、Windows や Macintosh で実際に使うことが可能になりますが、最近、JIS (日本工業規格) に採用されたアイヌ語用の新カタカナ文字が採用されたという話になってます。

ちなみに、エスペラントの字上符文字は、早い時期にユニコードに採用されていましたが、Windows や Macintosh は最近までユニコードに対応していなかったため、実際に使うことができませんでした。

エント、ソコニ、ラウラウは、アイヌの薬草についての話ですが、漢方や薬効成分についても述べています。

83 2002.12.7 エスペラント言語パック

Opera や Mozilla というブラウザ (ホームページ閲覧用ソフト) がありますが、OS 本体のインターフェース用 (メニュー・ダイアログ等) の言語をエスペラントにすることができます。このようなブラウザ本体から独立し、ブラウザにインストールするファイルを言語パックと言います。これは一般的なものではありませんので、色々と調査した結果を載せています。

82 2002.12.7 苫小牧エスペラント会・ザメンホフ祭のお知らせ

81 2002.12.7 2003年新春講習会のお知らせ

80 2002.11.25 最近のブラウザによる Latin-3 のホームページの閲覧方法

エスペラント字上符文字を表すために作成されたホームページとして、ユニコードが主流でなかった時代から蓄積されている文字セットが Latin-3 (ISO-8859-3) のホームページ

がありますが、そのページを見るのは面倒な設定があつて簡単ではなく、なおかつ字上符文字を表すことができないページもありました。

Windows XP になってから、Netscape、Opera、Mozilla というブラウザ（ホームページ閲覧用ソフト）では、Latin-3 (ISO-8859-3) を選ぶことができるようになりました。Internet Explorer では、コントロール・パネルの地域と言語のオプションのコードページ変換テーブルで、28593 (ISO 8859-3 ラテン 3) にチェックをつけると、Latin-3 (ISO-8859-3) を選ぶことができるようになります。これは、パソコンの内部処理の方式が、シフト JIS から、ユニコードで文字を処理ができるようになったためと考えられます。詳細についてはホームページをご覧ください。

79 2002.10.28 最近の Windows での字上符文字の扱い方

ワープロ・ソフトの「一太郎」、「Word」での字上符文字の扱い、エスペラント関係者が作った、「Esperantumigilo」、「Skribado」、「Kajero」というテキスト・エディタの案内、超漢字と超漢字エスペラント対応キットと案内、新しい情報も加えた新しい JIS 規格(シフト JIS X0213 方式) によるエスペラント字上符文字の扱いについて説明しています。

YOKOYAMA Hiroyuki <hel@msd.biglobe.ne.jp>

(prononcu: JOKOJAMA Hirojuki)

Hejmpaĝo de HEL	HEL のホームページ
Esperanto 版	http://www5d.biglobe.ne.jp/~hel/index.htm
日本語版	http://www5d.biglobe.ne.jp/~hel/jp/index.htm

そのほかの更新は次の通りです

Esperanto 版

- 44 2003.2.16 La artikoloj en la aina-lingva ĵurnalo "Ainu Times"
 - [la 20-a n-ro Unikodo]
 - [la 21-a n-ro ento (Elshotzia ciliata)]
 - [la 22-a n-ro sokoni (Sambucus sieboldiana)]
 - [la 23-a n-ro rawraw (Arisaema limbatum)]

- 45 2003.3.17 REZOLUCIO KONTRAŬ MILITMINACO

日本語版

- 85 2003.3.16 あるエスペランティストの手記 - 宮沢 直人
- 86 2003.3.17 戦争に反対する決議



Mia lernado de fremdaj lingvoj

アブハチ取めず・広く浅く

AMAGATA Yosihiko 天方 良彦

私の趣味の一つに、外国語のテキストの買い漁りがある。読めもしないのに、亀の子文字（戦前まで使われたドイツ語の活字）の辞書、チベット語の旅行記、中国語で書かれたウイグル語の入門書、ラテン語の聖書等を持っている。外国語の入門書はかれこれ20ヶ国語以上持っている。

大学時代にポルトガル語を専攻し、それに近いスペイン語もある程度理解できるつもりであるが、一番楽しく覚えたのは韓国語である。飲食店でアルバイトをしていた韓国人と知り合い、彼の（男でした！）アパートに遊びに行くたびに、彼の友達、そのまた友達と、いろいろな人達が入れ替わり立ち代り来ていた。彼らはそんな中にただ一人いた"変な日本人"に韓国語を遊びながら、飲みながら教えてくれたものだ。おかげで韓国クラブでホステスさんを笑わせるくらい話せるようになった。二十年近く過ぎた今でも、それに近いくらいはできると思う。

現在ハマっているのはロシア語である。その文法の複雑さたるや、ザメンホフがエスペラントを作った気持ちが良いわかった。（これがわかっただけでも、やった意味がありますよ。エスペランティストとして。）動詞の人称変化や格変化の複雑さ（固有名詞や数詞まで格変化するなって言うの！）、存在しない名詞には主格を使えないとか、不完了体と完了体、等々、ズボラな私の頭に「喝！」を入れてくれる。

「この努力をエスペラントに投入していれば、もっと良いエスペランティストになれるのだが...」といつも思いつつ、エスペラントの学習はいつも何番目かになっている。

私の言語体験を語るには、以下の言語にまつわる3つのエピソードが欠かせない。

1、中学生の時に国語の教科書にザメンホフの話が載っていて興味を持った。さっそく「四週間」を入手したが、読んでがっかりした。例文の中に忍ばせてあった、当時でさえ「前時代的」と思わせた内容のオンパレードには本当に残念であった。中学生でさえ「この本はやばい」と思わせるに十分であった。大学に入って Teach Yourself Esperanto に会ってもしほらくは、「エスペラント=左翼運動の道具」の等式が頭から離れなかった。

2、大学進学は外国語系と決めていた。父に相談した時に言われた一言。「ロシア語、朝鮮語、アラビア語はダメ。」ロシア語はスパイ、朝鮮語は反日、アラビア語は赤軍派とのあらぬ誤解を受ける、とのことであった。時代は変わった、今改めて選び直せるなら、ロシア語を選ぶだろう。ただ単純にアルバイトの口が多いかなあ？という単純な理由であるが。

3、中国語と韓国語の講座に通ったことがあるが、不幸にも両方とも同じ踏み絵があった。主催者が当然という感じで署名簿を回覧させるのである。「よろしかったらお願いします」と言うが... 二回共、受講生の中で、ただ一人署名を拒否した。特に韓国語の講座の方では、在日何人かから署名をしなかったということにいらまれた。

これを読まれた皆さんは、この私の事を「バカ」と言うか、「立派！」と言うか、「だからどうしたの」と言うか。ついでの時にでも教えていただければ幸いである。

以上、私のつたない外国語にまつわる体験談を披露したが、外国語学習の参考になっただろうか？ 機会があれば続きを書きたい。

Tompaj literoj

トンプア文字



eterno



ĉielarko



ĉielo



nordo



okcidento



sudo

雲南ナシ人の
象形文字

アジア市民団体フォーラム、国連に「言語と人権」問題討議建議

韓国エスペラント会機関誌「La Lanterno Azia」185号掲載記事（原文はハングル）

日本語訳 後藤 義治

12月9～13日、タイ、バンコクで国連所属の世界非政府機構主催、アジア市民団体フォーラムが開催された。

33カ国400余名の市民団体代表が出席した。この会議に世界エスペラント協会（UEA）を代表して、李チョンヨン UEA 部会長が参加した。李部会長の特別要請によって「言語と人権」分科会が設けられ、ここでの討論は12月11日、約40名の代表が参加して行われた。国連人権高等弁務官室（ジュネーブ）人権担当官 HUL Lu 女史の司会で李 UEA 部会長が「言語と人権問題」を中心に30分間話をして国連に対し建議案を提案した。40分間の論議を経て以下の様な建議文が採択された。

建議文

2002年12月11日バンコクで開催された世界非政府機構のアジア市民団体フォーラムに於いて、「言語と人権」分科会は世界人権宣言第二条に「人種、皮膚の色、性別、言語、宗教...の差別なしに全ての人々はこの宣言に定められた権利と自由を享受する権利がある」と定められていることを確認する。民主的であって平等である意志疎通に不可欠である言語権の保障なしには人権の完全な保障は不可能であるから動議する。特定民族のことばによって不平等又は有利な今日の国際言語秩序は国際的に言語的人権侵害を促進していることを考慮しなければならない。

1999年ソウルで開催された世界非政府機構の「言語と人権」分科会は国連は次の経済社会理事会に言語的人権問題を討議することを建議すると詳記する。

1985年国連教育科学文化機構の総会は国際間の相互理解促進をするために加盟国政府にエスペラント教育を試験的に使用すると決議することを明記すると共に、

1. 国連特に経済社会理事会は次の会議の議題に「言語と人権」を含めて、国際的言語政策、人権の言語的側面、並びに言語の違いによって国連行政の非効率性を論議し新しい国際言語秩序を考慮することを建議する。
2. 国連人権委員会は特別調査団を組織して言語的人権問題、言語的不平等、並びに口（語義不明）によって人権侵害問題を調査することを建議する。
3. 国際非政府機構は「国際補助語のための非政府機構連帯」の活動を支援して、各加盟国間の意志伝達にエスペラントと同様、中立的国際補助語を試験的に使用してみることを建議する。

心強い一歩ですね。また、ハングルをやっている E-sto が、けっこういるんですよ。（編）

Tradiciaj okupoj de udegeoj en la 19a jarcento

Al tiuj apartenis ĉasado (*vokse*), ekipaĵoj konsistis el sagoj (*tada*), pafarko (*be-i*), lanco (*gida*), tranĉilo (*kusige*), saketo por teni alumetojn aŭ etajn aĵojn (*padu*); streĉportiloj (*sina*); fiŝkaptado (udegeoj kaptis salmojn, ezokojn, k.a. specojn). Arbarkolektado: oni kolektis kuracajn herbojn (plantago, mento (*bakha*), oksikoko, vakcinio, ruĝa ribo, bluaj beroj, sovaĝa rozo, sovaĝaj piroj kaj pometoj).

Sociaj interrilatoj

Antaŭ ol udegeoj estis enkorpiĝitaj en Rusian imperion, ili kondukis primitivan, nomadan vivon, regulata de gentaj moroj kiel nesribita leĝo. Inter ili estas leĝo de sanga venĝo (ekzistis ĝis la 30aj jaroj de 20a jarcento), ili kredis al animigitaj bestoj (urso – *mafa*, tigo – *kuti mafa*), herboj kaj arboj, montoj, aliaj naturaj fenomenoj.

Udegeoj ne kredis diojn sed tamen majstrojn de la Naturo. La plej grava el ili estas la majstro de cielo – *Enduri*. La plej sendependa kaj forta majstro laŭ kredoj de udegeoj estis la majstro de fajro. Fajro estas mistero, kiun homo ne povas kompreni. Kune kun bonaj majstroj ekzistis malbonaj majstroj, por ekzemple, la plej elstara el ili *Amba*, kiu povas imiti imagon de homo, besto aŭ birdo.

La plej fama festo estas ligita kun urso (*mafo*).

En udegea vilaĝo grandan samano (tungusdevena vorto) havis signifon kaj influon. Li aŭ ŝi determinis riton por komenci ĉasadon, fiŝkaptadon. Samanoj estis kiel gardistoj de antikvaj moroj, rakontistoj, ili esprimis ideojn de popolo. Foje ili agis kiel kuracistoj kaj edukistoj.

Malgraŭ primitiva kaj ofte migra vivmaniero, udegeoj havis riĉan aron de muzikilojn – fluto, flautilo, stringaj kaj arĉaj muzikiloj. La produktitaj sonoj imitis tiujn de animaloj, birdoj, bruo de naturo, imitis homajn sonojn. 'Kunkaj' el bambuo estis la plej disvastigita muzikilo. Laŭ opinio de sciencistoj muzikludo similis tiun de nivĥoj. Udegeoj ankaŭ havis diverspecajn tintiletojn, kvikilojn kaj tamburinojn.

Kio koncernas metiojn, tiuj estis dividitaj inter viroj kaj virinoj. Kiel ekzemplo de pentraĵo kaj skulptaĵo oni povus nomi bildojn de tigo sur rokoj (neolitika periodo).

Nun prilaborado de metaloj, ostoj estas plene forgesitaj, praktike ne ekzistas spertuloj pri arbometio. Plejparte nur tre maljunaj homoj scias la metion, tamen ilia nombro falas ĉiam pli.

Mezlernejoj kaj ŝtata edukado

La unua mezlernejo malfermiĝis en 1927a jaro. Ĝi estis 2-jara, ĉar ne mankis sufiĉe da instruistoj kun udege-lingvokapablo. Malmultaj posedis udegean lingvon. Udegeoj prave timis ke la familioj restos sen sufiĉaj viroj kiuj povos subteni parencojn kaj familion.

Analfabeteco estis forigita inter udegeoj kun aĝo ĝis 40 jaroj.

En la lernojaro 1957/58 pli ol 60 udegeaj fraŭloj kaj fraŭlinoj studis en superaj kaj mezgradaj profesiaj lernejoj. Kiel aliaj malmultenombraj popoloj ili estis plene garantiitaj

Ŝtatan asekuron kaj financon subtenon dum studado.

Ekde la mezo de la 70aj jaroj 65.6 ĝis 95% de gelernantoj (8a klaso de elementa lernejo) aspiris daŭrigi mezgradan edukadon. Plejmulto estis fraŭlinoj. Fraŭloj eniris profesiajn altlernejojn kaj ekposedis diversajn profesion.

En 1998 la Ĥabarovska eldonejo eldonis vortareton de udege Kialundziga.

Partopreno en loka administrado

Dum la unuaj jaroj de Soveta regado, udegeoj havis specialan Indiĝenan Komitaton kiu helpis ilin kaj okupiĝis pri iliaj problemoj. Tamen la sovetaj registaroj en Primorĝe-a regiono ne distingis indiĝenajn popolojn kiel unikaj. Laŭ tiama oficiala politiko postulis ke ĉiuj popoloj devas fariĝi kaj formi unu, tiel nomatan soveta nacian identecon. La oficiala vidpunkto estis ke nacieco ne gravas. Malgraŭ tio ke la Soveta ŝtato faris la plej progresivan leĝon pri la egalrajteco de ĉiuj popoloj en Soveta Rusio kaj poste en USSR sed la registaro ignoris la naciajn specifikojn, ignoris tiun faktan ke oni ne pravus trakti malmultenombrajn popolojn simile kiel tiel nomatajn grandajn naciojn.

Aiŝflanke, la Soveta registaro prenis praktikajn mezurojn por enkonduki la novan kulturon por malmultenombraj popoloj. La tiama registraro komprenis signifon de unueco de la lando kaj subtenis kreadon de naciaj alfabetoj por neskribaj lingvoj. Finfine la Soveta registraro sukcesis nur plibonigi edukistemon, kulturen nivelon, plibonigis ekonomiajn kondiĉojn de multaj indiĝenaj popoloj.

Oni devas substreki ke la Soveta registaro ne tre favoris naciajn problemojn en indiĝena literaturo, eĉ sub tiaj cirkonstancoj tio estis oportune por esprimi morojn, tradiciojn, mondajn vidpunktojn. La ŝtato elspezis sufciajn kaj kelkkaze grandajn financojn por eldoni librojn en naciaj lingvoj. La lingvo kiu peris eldonadon de tiuj lingvoj estis la rusa. Konstatinte tion faktan, oni ne rajtas diri ke granda nacio kiel la rusa nure subpremis malgrandajn popolojn.

Ekzemplo. Kreskiĝis la nombro de libroj en bibliotekoj. En 1940 en la librejo por udegeoj en Samarga vilaĝo estis nur 30 libroj. En la 70aj jaroj ili estis jam 3-7 miloj libroj en diversaj lingvoj.

En 70-80aj jaroj aborigenaj specialistoj kun supera kaj meza teknika eduko okupadis ĉefajn postenojn en mezlernejoj, kulturdomoj, librejoj, malsanejoj, ŝtataj entreprenoj, en organoj de loka administrado de naciaj vilaĝoj.

Tia plibonigo ne konsideris kreadon de naciaj administracioj. La registraro timis ke inter pli ol 120 grandaj kaj malgrandaj popoloj ekestis disputo pri la egaleco. Tio ankaŭ koncernis la lingvan politikon.

La historio de malmultenombraj popoloj en Primorĝe-a regiono estas ekzemplo de interpopola komunikado. En internacia nivelo, la historio de la udegea popolo montras problemojn en interrilatoj de «grandaj» kaj «malgrandaj» popoloj. Ĝi povas alproksimigi la interkomprenon de najbaraj popoloj de la tuta Fororiento – Ĉinio, Koreio, Japanio kaj Rusio. Nuntempo la devo de ĉiuj «grandaj» nacioj estas helpi kunlaborante prezervi la trezoraĵojn de indiĝenaj popoloj en siaj landoj kaj faciligi ilian interkomprenon.

ĤABAROVSKAJ PENTRISTOJ

ハバロフスクの画家たち(2)

Miĥail Korĉmarjov

<前回までのあらすじ>

マリアナ・ゲオルギエヴナ・タチャニーナは市井の人々の一瞬を切り取った、親しみやすい絵を描く画家で、50周年を新作の個展で祝ったばかりである。その色使いで、画中の美女の視線は魅力にあふれる。(想像するに、日本でいえば、小倉遊亀のような画家なのではないだろうか。)

アレクセイ・フェドフォフは正規の美術教育を受けたことのない素人画家だった。いまや、掃きためた絵が世界中の収集家から買われる売れっ子。いま、モザイクで壁画を製作中。絵を手ほどきしてくれた父親へ恩を返したい思いでいる。

ゲンナジー・パヴリシンは、若いころにアムール地域の先住民たちの姿の素描を重ねたことが基礎になって、いまやハバロフスク名誉市民になるほどの代表的な画家となっている。

民俗画家 ゲンナジー・パヴリシン (承前)

Kaj precize en tia tempo komenciĝis la realigo de tiuj altaj pentraĵoj, kiujn Pavlišin faris je siaj junaj jaroj. Nanaja fabelo « Mekgen kaj liaj amikoj » ekbrilis sub la mano de Pavlišin per riĉo de koloroj, esprimpleno de subjektoj. Kaj aperintan pli poste libron « Amuraj Fabeloj » la pentristo ilustris virtuoze. Tia fenomeno en monda arto pli frue ne estis! La ilustraĵoj en ĉi-tiu libro kaj aliaj libroj impresas ne nur dank'al arteco kaj poeteco

de imagoj, sed ankaŭ dank'al vera realismo. La pentristo Gennadij Pavlisin konis kie neniu alia lerni ĝis fino la grandan kaj misteran mondon de kulturo, ĉiutaga vivo kaj tradicioj de popoloj de ĉe-amura lando. La internacia ekspozicio en Lejpcig (Germanio) « Amuraj Fabeloj » ricevis oran medalon kaj je ekspozicio en Bratislava (Slovakio) ricevis la ĉefan premion ~ « Ora Pomo ». « La Stela Ĥoro » de la pentristo, lia ĉefverko iĝis la granda murmozaiko « Poemo pri Amura Lando ». Ĉi-tio estis grandega multnomata laboro. Pavlišin kun sakego malantaŭ siaj sultroj trairis kaj traveturis centojn da kilometroj, serĉante bezonatajn por lia ĉefverko maloftajn kaj eĉ unukajn ŝtonojn. Tio ĉi estis la plej malofta je sia malfacileco laboro ~ kiam ĉiu el cent mil prilaboritaj ŝtonoj, iĝinta maldika plato, aperis sur sia loko. La bestoj sur la murmozaiko estas kvazaŭ kovritaj per naturaj haroj, kaj birdoj ~ per plumoj, en liaj okuloj estas mieno, karakteriza por ĉiu besto. Multaj alilandanoj parolis, ke la ĉefverko de Gennadij Pavlišin, kiu havas dek du kvadrataj metroj da areo, estas la plej bona aĵo el ĉio, kion ili vidis en Ĥabarovsk.

抽象画家 イリナ・オルキナ

Je distingo de Gennadij Pavlisin lerta Ĥabarovska pentristino Irina Orkina ne estas honora civitano de Ĥabarovsk kaj rigardo sur siajn verkojn ne estas parto de vizitprogramo por fremdaj kaj patriaj turistoj. Bildoj, desegnoj, gravuraĵoj de

Irina Orkina estas ne objekto por simpla adorado, sed objekto por profunda kaj serioza analizo. Sian vojon en altan arton Irina komencis kiel pentristino ~ ceramikistino kaj kiam ŝi fine decidis iĝi pentristino, ŝi jam plenfinis arta-industrian lernejon je nomo de V. Vásnecov en Abramcevo. Post la kursfiniĝo de arta fakultato de universitato en Ĥabarovsk, Irina Orkina igis laŭreatino de du moskvaj konkursoj de aplika arto. Kiel pentristinon Irinan Orkinan pli poste oni ekkonis en Vladivostok, Nahodka, japania urbo Kamakura. Irina ankaŭ estis partoprenantino de grupaj ekspozicioj en Japanio kaj Usono. Kaj ni permesas al ni diri certe, ke vizitintoj de la ekspozicioj rigardis sur verkojn de Irina por kompreni ilin, por muri al malsimpla, ne havanta klasikan harmonion, enan mondon de la pentristino. Irina atingiĝas tian rilaton al siaj verkoj dank'al ĉiamaj eksperimentoj kun formo kaj konturoj de pentrataj objektoj. Konturoj de objektoj, koloraj fregmentoj, homaj vizaĝoj sur desegnoj de Irina estas ege lirikaj, nerealaj, ĉio pentrita vivas kvazaŭ ekster reala mondo, kiel naskita per senlima fantazio de la pentristino. Tian pentraĵon de Irina kiel « Printempaj Aspiroj » ni povas nomi *abstraktisma* (原文では *abstrakcionista*) kaj en aliaj bildoj de Irina ekvidi influon de Pikasso, Matiss, Cuplonis. Certe, Irina havas grandan artan erudicion. Sed, sammaniere, la pentristino estas plene sendependa en siaj artaj ŝercoj. Ni ne

volas klarigi ĉi-tie enhavon de bildoj de Irina. Oni devas ekvidi siajn verkojn por kompreni ilin. Oni devas apreci unukan kombinacion de koloroj kaj malklaraj konturoj de homaj vizaĝoj sur la bildo « Vespera Konversacio ». Aŭ apreci tre originalan « Kolora Ekspresio »-n, liberan kompozicion de la bildo « Rivalo de Senso ». Estas ankaŭ tre simbola titolo de bildaro de Irina « Sonoj kaj Formoj de la Kosmo »! Realaj mondo, ĉiutaga vivo ne kontentigas Irina-n. Si bezonas sonojn, venintajn el kosmo, por, siamaniere, krei la propran kosmo, baziĝantan sur fantazio de la pentristino.

現実の輝きを; ヴィクトリア・ロマノヴァ

En alia maniero kreas siajn verkojn alia talenta pentristino de Ĥabarovsk: Viktoria Romanova. Sia arta mondo estas ekzakta, bone komprenebla mondo. En bildoj de Viktoria ceestas pli malmulte da abstraktaj simboloj ol en pentraĵoj de Irina. Viktoria amas admiri, desegni detalojn de l'mondo, de l'estado. Irina Orkina amas eksperimenti kun formoj de objektoj, sed Viktoria Romanova eksperimentas kun koloro kaj farboj. Si kvazaŭ ludus kun koloroj kaj ekbriloj, diversaj sulfonoj de lumo. Tre klare ĉi-tiu maniero de la pentristino estas vidata en bildaro « Sep Tagoj en Parizo ». (Cetere, malnovrusiaj aŭ apudmaraj pejzaĝoj de Viktoria neniamaniere estas pli malbonaj.) Viktoria ne kreas en siaj verkoj iajn abstraktajn mondojn, ŝi igas nin apreci

belecon de la mondo, kio ĉirkaŭas nin. Certe diversaj abstraktaĵoj ankaŭ estas en bildoj de Viktoria ~ ekzemple, bildoj nomitaj « Vizioj de Vita ». Ni pensas, tio ĉi parolas nur pri universaleco de talento de Vita Romanova, neripetebleco de sia verka maniero. Tion ĉi konis kompreni kaj vizitintoj de kvin personaj ekspozicioj de ĝentristino kaj ankaŭ vizitantoj de muzeoj en Ĥabarovsk, Ĉita, Komsomolsk, Naĥodka, Vladivostok. Pentraĵoj de Viktoria ankaŭ ĉeestas en personaj kolektoj de Rusio, Usono, Ĉinio, Finnlando, Japanio, Nederlando, Suda Koreio. Ni volas esperi ke tiu ĉi ne estas finamo. (Daŭrigota)

コルチマリヨフさんと縁ができたのは偶然です。第1回極東ロシア訪問団がハバロフスクを訪ねたときに、参加者でアイヌ民族の山道アシリレラ道子さんが、エスペラントの服を着ていました。たまたま、それを見かけて声をかけてきたのがコルチマリヨフさんでした。

コルチマリヨフさんの生活は貧しく、彼を訪ねた青年が、そのことを語るときに涙するほどでした。

ちなみに、コルチマリヨフさんの住所は 680000 Str. Volochayevskaya 153-70, Ĥabarovsk, Rusia Federacio (Russia Federation) Михайл Корчмарёв です。

★★

学習のページ

Preĝo sub la verda standardo 緑なる旗の下での祈り

Lazaro Ludoviko Zamenhof

ユダヤ人の眼科医ザメンホフが、このことばを創ったのは、相互理解によって平和をもたらそうと欲してのことでした。初めての世界大会でザメンホフが朗読したのが、この詩です。同じ大会で、エスペラントの中立を決めた宣言が可決され、開催地の名を取って、ブーローニュ宣言と呼ばれます。ザメンホフは自由なエスペランチストたちのなかのひとりという位置に下りました。しかし、その生涯をかけた想いは、多くのエスペランチストの心に響き続けています。

Al vi, ho potenca senkorpa mistero,
 Fortego, la mondon reganta,
 Al Vi, granda fonto de l' amo kaj vero
 Kaj fonto de vivo konstanta,
 Al Vi, kiun ĉiuj malsame prezentas,
 Sed ĉiuj egale en koro Vin sentas,
 Al Vi, kiu kreas, al Vi, kiu reĝas,
 Hodiaŭ ni preĝas.

● Vi=mistero=fortego,
 kiu regas la mondon
 動詞からできた形容分詞でも目的語を持てます。
 Vi とは通常、「神」といわれる存在でしょうか。文の幹は、終わりの Ni preĝas。この8行で1文です。

Al Vi ni ne venas kun kredo nacia,
Kun dogmoj de blinda fervoro:
Silentas nun ĉiu disput' religia
Kaj regas nur kredo de koro.
Kun ĝi, kiu estas ĉe ĉiuj egala,
Kun ĝi, la plej vera, sen trudo batala,
Ni staras nun, filoj de l' tuta homaro
Ĉe Via altaro.

Homaron Vi kreis perfekte kaj bele,
Sed ĝi sin dividis batale;
Popolo popolon atakas kruele,
Frat' fraton atakas ŝakale.
Ho, kiu ajn estas Vi, forto mistera,
Aŭskultu la voĉon de l' preĝo sincera,
Redonu la pacon al la infanaro
De l' granda homaro!

Ni ĵuris labori, ni ĵuris batali,
Por reunuigi l' homaron.
Subtenu nin, Forto, ne lasu nin fali,
Sed lasu nin venki la baron;
Donacu Vi benon al nia laboro,
Donacu Vi forton al nia fervoro,
Ke ĉiam ni kontraŭ atakoj sovaĝaj
Nin tenu kuraĝaj.

La verdan standardon tre alte ni tenos;
Ĝi signas la bonon kaj belon.
La Forto mistera de l' mondo nin benos,
Kaj nian atingos ni celon.
Ni inter popoloj la murojn detruos,
Kaj ili ekkrakos kaj ili ekbruos
Kaj falos por ĉiam, kaj amo kaj vero
Ekregos sur tero.

● 民族国家を超え、宗教を超え、教条主義を超え、じかに自分の霊で宇宙意志と向き合う。Altaro は alt+aro ではなく、一つの語根から成る単語で、「祭壇」。

● Kruela :冷酷な。「101 匹ワンちゃん」の悪役はクルエラ・デ・ビルという名でした。Ŝakalo :ジャッカル。

● 後ろ2行は主語+動詞+目的語+補語の文型。
-u の意志動詞で、nin が kuraĝa であるように ni が teni してほしいということ。

★ 3月20日以来のイラク戦争が、世界中に蔓延する敵意を助長するのは必至。それを憂慮する声が世界に満ちています。だから、この詩を使いました。

(樺山 裕介)

2002年8月15日、私の息子ポンションとその母親ケイコが消息を絶った。盆休みに彼女の福島県の実家に二人で訪れたあと、北海道行きの船に新潟港でのるとでたきりだった。その前日に私は電話で彼女に生きたカブトムシを十四ほどおみやげに持ってくるようにたのんだ。山道アイヌ語学校の子供たちにそれをあげたかった。今年は無常気象でカブトムシはとれなかったと彼女は言っていた。そのときポンションと電話で話したいと思ったけれど、なんだかだめな父親みたいだと感じてやめてしまった。そして、船が到着する日になっても彼らは帰ってこなかった。

幾日か私は待つことにした。彼女が家でゆっくりしたいのかもしれないし、仙台の友達に会いに行きたいとも言っていた。ただ彼女が携帯の電源を切っていることに少し腹をたてていた。これだけは念を押していたのだから。だがこの時期、私は彼女に対してゆったりかまえてやっていた。だから頑固で無神経な彼女の父親や気のきかない母親にも（私は彼らと一度会っただけだ。彼の生活の自信、彼女のとまどうやさしさ。）彼らの孫に会う権利があるのだと、勝手に寛大な気持ちになっていた。気持ちよくポンションとケイコを送り出した。結果として、私のこの気持ちをケイコは利用したのかもしれない。（ひとにやさしくすることの傲慢さの結果。あるいは私の鈍感。）

彼女の職場の盆休みが終わっても、札幌にもどってこなかった。私は彼女の無断欠勤で事態の重大さを確信した。死体が発見されないような事故か事件。生きていればよいが、その可能性は日がたつにつれて低くなる。（ちょうどそのころ幼児を人質にされた母親が車を運転させられ数時間後に解放されるという事件が起きていた。）心当たりに連絡しても手がかりはない。役にはたたないと判ってはいても、警察に行った。ピントのずれたことしか言わないケイコの父親を説得して、捜索願いを出させた。暴力団の友人に相談をもちかけた。私の母親はやたらあちこちに電話をかけて、私にもっと計画的にことを運べと怒鳴られた。（高校の頃、遺書をのこして行方不明になった女の子。私にできることはあのころも今も変わらない無力なのか。）ポンションのおびえた表情が目にかんでは消える。

職場にビジネスライクなケイコの退職願いが届いて、私は力がぬけた。ほどなくポンションのかよっていた保育園に退園届け。市営住宅の管理組合に転居届けが郵送されてきた。消印は札幌だった。調べてみたら、引越しも何者かによってケイコがまだ福島の実家にいるうちに行なわれていた。ケイコが組織的な支援とアドバイス（指導といってよい）を受けて、私をだましつづ長期間にわたる準備のもとに行動したのだ。（私が親とたたかう高校生友人を支援したように。だが私はいつも彼女らの両親に話をしにいったものだ。）

私は、経験をつんだフェミニストグループのやりかた

だと思っている。激昂した男を説得するには、まほどの覚悟と犠牲が必要になる。危険をさけるためには一切の接触をたつのが一番よい。いまや国家権力も力を貸すようになっている。緊急避難としてのみ、私はこのやりかたをやむをえないものとして認めている。だがその目的と反して、このやり方は当の女性の当事者能力を奪い、ひいては解放を遅らせ、人間関係の荒廃とカルト的フェミニストの再生産へとつながる危険と隣り合わせなのだ。私の福岡の友人外山恒一は、つきあっていた女性への傷害でいま刑務所に入っている。気の毒なのは、その彼女の告発の最大の動機があたらしい恋人への外山のつきまといだということだ。もちろん、それはその恋人の虚言だ。私はかなり重症の精神疾患だとふんでいる。つまり、気の毒だというのは外山ではなく彼女とその恋人についてだ。福岡のフェミニストたちはこの事に真剣にとりくんだように見えない。ただ女性の敵外山に罰をあて、社会から隔離しようとするばかりだ。

私はいま立派な外山恒一のようにフェミニストと直接たたくつもりはない。いままで私は、女親、男親、教師、学校、大学、コミュニスト、職場管理者、電力会社、警察、海外日系企業、そのときそのとき聞いたつもりだ。しかし愛していないものと闘うのは、できるだけさけたいと思っている。だから、私がこれから真剣にたたかうのは、私を好きだと言ってくれる女性にしたい。傲慢なフェミニストではない。

子供の解放運動にたずさわった者として（あるいはひとりの男親として）言うておくが、ポンションには私に会う権利がある。私がもうろうくしてしまう前に、彼との思い出と私の経験を伝えたいと思う。

ポンション君への手紙

君は僕のことをバシとよんでいた。（缶コーヒーのボスを見て、ボスとは髭のことだと思っただけ。）

君がいなくなったのが夏のまっさかりだったのに、もうこちらでは鈍色の雪が降りはじめた。スクリーンで見る帝都東京の雪はクーデターのおいがするが、北海道のこの時期は大陸の憂鬱につつまれる。

僕がロシアへ行く時、君はずいぶん泣いて佳子つまり君のおかあさんを困らせたけれども、たぶん君は新潟行きの立派な白い船にのりたかっただけなのだと思う。そして君は、北海道を去るときにその立派な船におかあさんとふたりで乗っていったのだろう。（僕が小樽港をはなれるときは樺山君が北大寮歌を歌い出して、僕たちは船の甲板の上でいっしょに歌った。まるでもう帰ることがないかのように。）

いずれにしても、ロシアは君にとって、（子供の遊び場があるけれども大人といっしょでなければけっして

訪れることのできない) ダイエデパートのように、近くて遠い存在だったようだ。僕の妹、つまり君のおばさんで、君がおねえちゃんと呼んでいた人が、僕がロシアから帰ってしばらくしていきなり電話をしてきた。「ポンションはロシアへいくのって聞いたら、うんロシアへいくってこたえたよ。」僕の妹はただそれだけをつたえたかったらしい。

次の秋には君とロシアにいくつもりだった。ウラジオストックで君と同年のニーナに会って、君たちが仲良くなって、僕はセルゲイとの約束を思い出すのだ。ウラジオストック出身のセルゲイは僕と同年の友人で、早すぎる孫の誕生にいくぶん戸惑っていた。その彼と約束したのが君とニーナの結婚だ。僕もニーナとはまだ会ったことはない。

ウラジオストックの街にある海水浴場は静かな入江だ。もう秋には誰も泳ぐ者はいない。それでも週末には家族連れや若者や観光客が集まってくる。出店や少し古ぼけた遊園地があるのだ。通りの奥には百年前に建てられた廃墟のようなレンガ作りの建物群の一面が見える。丘の上には地味な水族館と植物園がある。

この時期の海はいつでも静かな灰色で、海風は冷たい。アムルスキー湾の対岸もロシア領なのだが、なんだか朝鮮か満州が見えるような気がする。ヨットハーバーの横の海産物売り場ではえびやキャビアが買えるが、けっこういい値段だ。(小さなさびしいフィッシャーマンズワフ、サンフランシスコのにぎやかさ。)

僕は君をつれて、ここの遊園地を訪ねようと心に決めていたのだ。野外人形劇を気に入るだろうか。本物の馬に乗って遊園地を一周したら、君は喜ぶだろうか。僕はこの小柄な馬に乗りたかったのだが、乗っているのは子供ばかりだったのでやめてしまった。もし君が気に入ったら、毎日、毎日ここを訪れてもよい。(僕には小さすぎる遊園地、君のはじめての異国の遊園地)

まだいくぶん日が長かったころ、(そう夏のまっさかりはもう日が短くなりはじめているのだ)僕は仕事を大急ぎでおえて、君と君のおかあさんといっしょにムエン浜に向かった。車にすぐ酔ってしまう犬のウルーリもいっしょだった。途中には春から夏至にかけて何度も訪れた石狩川下流の河畔がある。トゲウオやハゼをとった沼地、でっかいシジミ貝のいた干潟、ひろったヤナをしかけてモズクガニをとった入江、(僕は西表島のジャングルで米だけ持って何週間も過ごしたんだ)でもこの日はまっすぐ海岸をめざした。日没がせまっていた。

海辺の入り口には夏場だけ縄が張られて、入場料をとられる。この時期だけシャッターをあけてビールやジュースを売っているあばら家がある。そこが管理人の老夫婦のいるところだ。たぶん海岸沿いの土地の地主なのだ。いったい夏場以外は何をしているのだろうか。僕は駐車料として600円を払って、(じいさんはいくぶん気まずそうに、いくぶんいぶかしげにお金を受取って縄をほどいた。)ずんずん浜の奥に車をすすめた。いつもは必ずいる釣り人がいない。そして海水浴には今年は雨が多くて冷たすぎる。

細長い砂浜に大きな流木がいくつも流れ着いて、やわらかい岩の崖がせまっている。(僕はすこしばかりの間、崖の下で第四期の貝化石をさがしてみたが、きれいなのはみあたらない。)以前この流木で、焚き火をすいぶんした。もう十年も二十年もまえの話だ。いま波は静かに打ち寄せている。(本当は、この風向きなら鏡のような凧のはずだった。いつも誰かを連れて行くと予測がはずれてしまう。)この波でも君と君のボートにとってはちょっとした大波だ。僕はガリバーのように君をのせたボートの引き綱を引いて、波をかきわけて海のなかを歩いた。君は最初すこしとまどったようだが(君はたいへん臆病だ)小さな波にゆられてごきげんだった。大きな波が一度二度とやってきて、君は敏声をあげた。最後にとうとうボートは横波をうけて転覆した。ライフジャケットのおかげで、君はおぼれなかったけれど、顔にすっかり海水がかかってしまった。これが君にとってたいへんな苦痛であることは、君の大好きなお風呂あそびの後の頭洗いでの大泣きで僕は知っている。君はよくこらえた。ただボートを乗り捨てて僕と手をつないで海の中を歩くことにした。子供は皆そうなのかどうかわからないが、君はおかさんや僕と手をつないでずんずん歩くのが好きだ。日が沈みかけた海をずんずん歩いた。君のおかあさんは少し後ろから砂浜の上の方をついてくる。犬のウルーリははるか遠くを探検しているのか、姿がみえない。

君は勇敢にももう一度ボートに乗ったあと、僕たち以外誰もいない暗くなりはじめた海をふたたび歩いた。(僕はこのさみしさが好きだ。)老夫婦の売店でアイスクリームを買うとき、君はどれを選ぶか迷っていた。(君がどうでもいいことに迷うのは、僕といっしょだ。)夕暮れの浜で、つげ義治の漫画にでてくるような売店だった。

ホームセンターで、君にねだられて、あの小さなビニールボートを買ったとき、君のおかあさんは僕が君にあまりと言っていた。僕は君がもう少し大きくなったら、いっしょにゴムボートで茨戸川水系を探検しようと思っていた。本当はヨットを使って、アーサー・ランサム「ツバメ号とアマゾン号」のまねをしたかった。だが僕にはヨットの操縦はできない。僕の父は高校時代ヨット部だったらしいけれど、彼が死ぬまで僕はヨットにのる彼を見ることはなかった。(ひそかに僕は海賊にあこがれていた。)君のおかあさんに、僕はそうしたことをしゃべったことがなかったのかもしれない。あれだけ読むようにすすめた少年冒険小説も彼女は読まなかった。

僕は、君をさそって僕の母(君がタータンと呼んでいた人だ)に買ったばかりのボートを見せにいった。君は水着に着替え水中眼鏡をつけて、床の上にふくらませたボートに勇ましく乗り込んで大喜びだ。楽しいことは三度ある。想像しているとき、体験しているとき、思い出になったとき。どれかひとつで君はしあわせになることができる。(僕の革命の夢、想像の同志たち)

君には一度、月と共に暮らしてほしい。それには、まっすぐ沖繩にいくのが良い。それも一番の離島だ。海は月の

満ち欠けで、その表情を大きく変える。新月の夜、リーフに砕ける波の音だけが海の中を歩く道標だ。懐中電灯はただ足元の深みを辛うじて知らせる。何回も珊瑚のするとい刺で足にけがをした。僕は泣きながら陸地へのルートを探した。明るい満月の夜おなじ大潮に、美しいニライカナイへの道を夢見がちに歩いたその道だ。(僕の高校の後輩はこのあたりで溺れ死んだ。)

香港人のビル・マックが札幌の観光をしたいというから、近所の商店街につれていった。彼は、米の自動販売機と保育ルームつきのパチンコ屋に感動して写真を撮っていた。僕は子供向けの駄菓子屋をみつけて、ゴム動力の模型飛行機とひもを引っぱって飛ばすヘリコプターを買った。(当時僕はしぐみの違うおもちゃを集めていた。将来、君にもしぐみのおもしろさをわかってもらえることを期待して。) 帰り道、君はずっとヘリコプターの袋を手持ち「とぶのかなー」と言いながら目を離さない。僕の家に戻って、僕はヘリコプターを組み立てて飛ばして見せた。君はまだ自分で飛ばせないから、何回も僕にそれをやらせた。君は、寝るときもふとんの横にヘリコプターを置いて寝たとケイコは言っていた。

その日、僕たちはまっすぐには帰らず、君もつれて居酒屋によったのだ。君に焼き鳥をすすめたいけれど、君はいらないという。(子連れで飲み屋に行くのが僕の夢だった。) 僕たちがカウンターで、万里の長城でのマックの冒険談を聞いている間、君はひとりでこあがりについて、ビール会社のポスターのピキニの女性をながめていた。そういえばスーパーのミニモニのポスターの前でしばらく座り込んでいたね。君は若くてきれいな女の子をとっても好きようだ。僕もそうだった。僕の父が古手川祐子の映像をじっと見ていたのも印象深く覚えている。だがこれから君はみたくなくてかわいいものをたくさん見たり経験したりするだろう。そのことを大切にしていけばよいのだ。

君がまだずいぶん小さくてやっと歩けるようになったころ、小樽でのエスペラント大会をぬけだして二人で外を散歩したとき、僕の手をはなして君がひとりで歩き出した。そして若い女性が通りかかると手を後ろにそらしてポーズをとるのだ。女の子たちが「かわいい」と言っていくのをみながら僕は思った。こんなにはやく君には自分が他人にどう見えるのかわかっているのだろうか。そして君がかわいいのはいまのうちのうなだ。君は多くの女性に無視されながら、少年期、思春期、長い人生をおくらなければならない。

若い女の人のほかに君の好きな物は、くるまと飛行機と新幹線をのぞけば僕はそういったものは好きでないから) 毛のふさふさしたぬいぐるみや動物だ。高井さんが廃棄ゴミの中から見つけて持ってきてくれた緑色のうさぎのぬいぐるみが、君のおきにいらだ。いつも君は「うさあさん」を僕に持たせて、取っ組み合いや秘密の場所をいっしょに探検したりした。(僕は優秀な人形遣いだ。) 僕が酔っ払っているときはうさあさんも少し乱暴になって、君を叩きのめしたりもした。君

が「ちょっと見てみるか」と言って小さな虫のわいた植木鉢につれていく。うさあさんと君は小さな虫たちをじっと眺めたり、つついてみたりするのだ。(君はちまちましたものも好きだった。保育園に君をむかえにいった時、他の園児とはなれて、君ひとりでじっと足元の蟻を見ていた。)

りすさんを買ったとき君はうれしそうだった。しばらくかごで飼っている間、かじられるからと言われて君は指で触ることができなかった。流木をつみあげた広いベランダにりすたちは放され、その姿を簡単にはあらわさない放し飼いになった。(大昔、僕の父が庭をながめながら、りすが姿をあらわすようなら楽しいだらう、と言っていた。父が死んで僕は庭にりすを放し続けている。) ほとんど姿をみせないりすさんに君は、梅干しの種やくだものきれはしをベランダにながてあげていた。

君は、ネコとおなじように犬も大好きだった。でも公園で大きな白い犬にじゃれられたことがあって、臆病な君はすっかり犬をこわがるようになってしまった。ゴミ処理場で銅やアルミをあさっていた雑品屋のおやじが何匹かの小犬を軽トラックの屋根にのせていた。僕はそのおやじに頼んで汚れた小犬を一匹ゆずってもらった。君の兄弟がわりにと買ったのだ。その日、君がいつものように僕の家の階段をあがってきて、その小犬をみて泣き出してしまった。僕がついているから大丈夫だよって言って君の顔をなせても、うん、うんとうなずきながら泣いている。それが君とウルーリの出会いだ。

しばらくすると君もウルーリと遊ぶようになって、水鉄砲で追い掛け回したり、「ウルーリ噛んだ」と僕にいつけるようになった。「噛んだらだめだよ」とウルーリに言うとき君は満足していた。ときどき「かわいいね」と言って背中をなせていた。ちんちんをのぞきこんだり、もう少し時間があればよい幼友達になっただろう。

河川敷に子供車を持って行って、君を乗せて坂を下り降りた。ウルーリに引かせて河岸を疾駆した。君のはしゃいだ顔を僕は忘れられない。君がいなくなると判っていたら、もう一度今度は君があきるまでウルーリ車で走り回ればよかった。

君はあめだまやお菓子をほしがってずいぶんだだをこねた。最初は、家でいっさいあげなかったで、君は保育園ですきをみて友達チョコレートを食べてしまった。それから僕が缶コーヒーを飲むように車に乗ったときだけ、君はあめだまを嘗めることができることになった。家では、おかあさんやお客さんと半分づつにしてお菓子を食べることになった。君は「半分こっこ」と言ってお菓子をねだるようになった。(アッキームとヨーットは毎日のように食べた。) ピーナッツは皮をむいていてぬいに二つに割ってウルーリとわけていた。

ダイエーで子供むけの出店がでていて、君はすこしまよって輪投げに挑戦した。てれておどけるように立ち位置に立って、君はおもいきって輪を投げた。投げ輪はおおきくはずれた。君はその場でしゃがみこんでしまった。

みんなにはげまされてもちなおれない。しょうがないので僕がそのあとの輪をなげて、つぎに射的もトライしてチョロQのように走り回る虫のおもちゃを三つもらった。ポンションはすいぶん気に入っていっしょに何回も遊んだ。でも外におきっぱなしにしたのでウルーリにかじりこわされてしまった。ケイコは残念がっていた。(管理をきちっとできなかったことをくやしがることは、すごく大切なことだ。)

君が頑固で臆病なのは、もしかしたら僕と共通の資質なのかもしれない。かんしゃくもちもだ。僕とケイコのけんかの間、君は僕の母の部屋にいて君専用のふとんをしいてもらい、「くしゃくしゃにするの」と言って何度も何度もふとんにやつあたりをしたらしい。(僕は二段ベッドでふとんをぐしゃぐしゃにして、はしごから落ちかけた。それが原因で足を折って生れてはじめて入院した。)君は説明を受けなくて、ものごとをやらされるのが大嫌いだ。エスペラントのビデオをみんなで作成したとき、説明も無く引き回されるのに君は激怒して着ている服を脱ぎ捨てて床に叩き付けていた。

保育園の遠足で、広い芝生と様々な家畜の畜舎のあるサトランドに君と君のおかあさんが参加していた。僕は仕事を途中でぬけだして君たちを探し出した。君は日に焼けて真っ赤な顔をして、僕をみつめたときひどくうれしそうだった。僕がにわとりをつつくと、君は危ないからやめるとばかりに僕の手をひっぱった。僕はトンボを獲ったり、オオモンシロチョウの寄生蜂をみつけてうれしくなった。(この蝶は庭のヤマワサビを食べ尽くしてしまう。)君は右手で君のおかあさんと手をつなぎ、僕とは左手で手をつないだ。君は僕たちに仲良くしてほしかったのかな。(そのとき僕はケイコと仲良しだと思こんでいたのだけれど。)

君のおかあさんは福島大学の教育学部で共産党系の学生自治会の委員長をしていた。僕は学部はちがったけどそこで新左翼系の歴史学研究会というサークルの活動をしていた。自治委員会という会議でいつも対立していた。当時、教授会も共産党系で学生自治会はそのいいなりだった。いつものように会議で対立したあと、僕は自治会長だったケイコにつめよった。そのときケイコは「かんべんしてくださいよ」と言った。ああ彼女はわかっているのだ。ただ立場上どうすることもできないのだ。そう僕はおもった。(大きな誤解だったのかもしれない。)そのあと僕たちはいっしょにお酒を飲んだりするようになった。

大学を中退して、僕は沖縄の離島のリゾートホテルで働いた。サンフランシスコでエスペラント講習を受けた。札幌でパートタイムで働いたり、営業マンもやった。十代の諸君と原発に反対して電力会社に突入した。留置場のなかで政治のしくみにやっと気がついた。力のないものは誰もあいてにしてくれない。元気のいい若い諸君三十人と行動する僕をちやほやする人たちがいる。利用しようとする人がいる。つぶそうとする人がいる。君のお

かあさんには経験したことのない世界だ。(彼らには二度と会いたいとは思わないが、僕の本当の先生たちだった。)

反原発運動に敗北したあと、カンボジアで僕は取材活動をしようとした。現地のエスペランチストにカンボジア語を教えてもらったけれど、ものにならなかった。国連のマスコミ向けブリーフィングは僕の解せない英語だ。目的をはたせず帰ってきた僕が、とりあえず帝国主義言語、英語を学ぶことにして、サンフランシスコに向かったのはそれから数年してからのことだ。

最初、サンフランシスコの英語学校では苦勞した。教師に「私の言うことわかる?」と聞かれて、理解できずに「僕、このクラスで勉強したい。」とだけ繰り返して答えていた。

まだ僕がろくに英語をしゃべれないころ、メキシコでサパティスタが蜂起した。蜂起の宣言文を読んで僕は涙がとまらなかった。アメリカのNGOが解放区のおそばのチアパス州を訪れるツアーを企画した。僕はすぐに参加を申し込んだ。参加者の英語はまったく理解できなかった。ひとりだけメキシコ系アメリカ人の女性がいて、彼女が全部僕にわかる英語に通訳してくれた。(アメリカでは日系人もメキシコ人も同じ被抑圧民族だ。)

チアパスから戻ってほどなく、メキシコのヌエボラレドという町でソニーの子会社の工場で大規模な解雇が行われたという情報はいった。しかも彼らに損害賠償が要求されるかもしれないという。サパティスタの蜂起はメキシコ全土の労働者の闘いと結びつけば勝利するかもしれない。

ツアーでいっしょだったメキシコ系の女性に通訳をたのんで、僕は現地にのりこんだ。カンボジアで手にいれたプレスの身分証をふりかざして、「私は日本の新聞記者だ。君たちのことを取材に来た。」と工場の前で叫んだ。現地の新聞は一面トップで僕たちのことを記事にした。工場のそばのドリンクショップで、若い女性が僕たちに近づいて、まわりに人がいないのを確かめると、服の下から新聞のたばをとりだし僕たちに渡した。彼女らの闘いを伝える記事のスクラップだった。白いお腹がまぶしかった。

僕は、日本の週刊紙にむりやり頼んで記事を掲載してもらった。東京と札幌とサンフランシスコで抗議行動を準備して、僕はメキシコシティでハンストをすることにした。今度は通訳なし、かたことのスペイン語で支援を頼まなければならなかった。「ソニー労働者弾圧する。私ハンストする。あなた支援しろ。」弾圧が予想されるので現地のエスペランチストとは連絡をとらなかった。日本から呼んだ女の子は、こわくて毎日泣いていた。共同通信の記者は、メキシコ嫌いの神経症になっていてそんなことしたら殺されるぞと言っていた。

無事サンフランシスコに戻って、集めてきた英語やスペイン語の資料を読まなければならなかった。ヌエボラレドやニューヨークに取材に行く必要もあった。労働者たちの運命がどうなったかもわからなかった。ここでも

んばれば僕は、ジャーナリストか革命家かあるいは革命的ジャーナリストになれたかもしれない。だが僕は力を使い果たして鬱状態におちいってしまった。(僕は小学生の時から躁鬱症状に悩まされた。もし君もそうならいい医者をみつけたほうがいい。)

君のおかあさんがサンフランシスコに来たのは、ちょうどこのころだ。彼女の力をかりて少しでも仕事をすすめようとしたのだ。ただ彼女は言語がわからないことのシリアスさも、命がけで抗議することの重みもよくわかっていなかった。それはわるいことではないが、僕を理解することはひどく難しかっただろう。

ダイアンはオーストラリアに僕と同年の息子がいる。一年間大阪の英会話学校で教えていて、会社にエスペラントも教えるよう提案して却下された。彼女は日本の若者にエスペラントを広める方法を僕に熱心に語り続けた。僕はベジタリアンのダイアンをつれて、さくらんぼ農園やいちご農園を訪れた。(君と来ようと思っていた所だ。)ミズナラの太木が霧の中にそびえる山や小魚の群れる池にも立ち寄った。君の保育園にも立ち寄ったよ。(年長の子がダイアンに英語で話しかけようとしていた。)

ダイアンは日本語をしゃべれないから、君にエスペラントで話しかけていた。ダイアンがいなくなったあと君は「ダイアン、ダンコン」といいつけていた。

君が5才ぐらいになったらエスペラントを勉強するかどうか聞いてみようと思っていた。それまでは、ただいろんなエスペランティストと遊んでもらうだけでよい。やむをえない場合をのぞいてネイティブのエスペランティストはいない方がいいのだ。エスペラントは万人が自らの意志で平等に学ばなければならない言語、民主主義の言語なのだから。

君の名前を決めるとき、僕は沖縄の製糖工場で働きながら、三つ考えた。ジュンゲン(伊藤博文をハルピンで暗殺した朝鮮の愛国的軍人、安重根)ギルー(沖縄の伝説的大泥棒ウインタマギルー)そしてポンションだ。意味はアイヌ語でちいさなうんこ、正確にはポイションと発音する。僕は君に日帝本国人の名前をつけたくなかった。かといって、ハイカラなエスペラント名も好きにはなれなかった。世界市民であると同時に、君は日系アイヌモシリ人になるのだと思っていた。君のおかあさんはジュンゲンが一番いいと言って泣いていたけれど、僕はそのとき沖縄にいて自分には北海道しかないと思っていたから、強引にポンションに決めてしまった。そのとき電話で相談したので、山道さん(アシリ・レラ)は君の名づけ親だと思っている。(君は山道アイヌ語学校に留学するはずだった。)

だが君はアイヌ民族ではない。名前まで和人に奪われることをアイヌの人たちはどう思うだろう。君は君の名前に誇りと、解決しなければならぬ歴史の課題を感じてほしい。

毎年、京都からアイヌモシリツアーの学生諸君がやってきて、僕の家泊まっていく。彼らとニウンベツの山に登った。君も少しは自分で登ったけど、あらかた僕の背負子に乗ってだ。帰り道、学生諸君と手をつないで大声で笑いながら君は駆け下りていった。こんなに長い下り坂は初めてだったのだ。僕は君が舌を噛んでしまうのではないかと心配した。

彼らがもう少し大きくなったら君に悪い遊びを教えてやると言っていた。僕はそれが楽しみだった。(僕は君には年をとりすぎている。)

君のおかさんは僕の家をなかをかつけたり、書類の整理を一生懸命してくれた。ときどき、なんでこんなことをしなければならぬのかと、文句も言った。多くの人がこの家に来してくれるのは、僕や君のおかあさんに人徳があるからではない。僕の母と妹が無理を聞いてくれて大きな家を僕に使わせてくれているからだし、なによりエスペラント運動やさまざまな市民運動にかかわってきたからなのだ。(僕はとはなれても君の世界が広がっていきますように。)

君のおかさんと一緒に住む前、当初僕と仲間たちは世界中で行動する左翼エスペランティストの拠点を札幌に作るようとしていた。永遠につづく言葉の勉強と国際文通、たあいのないエスペラント界のよもやま話、僕たちにとって中立系のエスペラント運動とはそんなものだった。

仲間のひとりが中立運動の改革案を北海道エスペラント大会に提出してしまった。中身はたいしたものではない。だれもが感じているようなことだ。これに当時ひとりでがんばっていたエスペラント連盟の事務局長が怒ってしまった。僕たちに事務局長を引き受けて、連盟の運営をやれという。僕たちは運営を引き受けて責任をはたそうというものと、こんな展望のない人々とはいっしょにやれないという者にわかれてしまった。どちらにしても左翼エスペラント運動の拠点は、事実上の活動の休止をよぎなくされた。

フランス革命でのこと。蜂起軍のバリケードが正規軍の猛攻をうけて陥落しそうになった。そのときある男がバリケードの上に立ちあがり革命旗を高々と掲げた。それを見た市民達は打ち倒されたその男に次々と続きバリケードを守った。ある若い男が「俺はあの男を知っている。英雄なんかじゃない。いつも街で飲んでいたごろつきだ。」するとそばにいた蜂起軍の指揮官が言った。「黙れ。いま彼は確かに英雄なのだ。」

人々が実績のない者をいかに軽んじるか僕は知っている。意見や提案、ユニークな発想がいくたび無視されていったことだろう。「私は反対しないから提案した君がやりなさい」こんなことをいわれたら誰も提案ができなくなる。

会議に議題を準備し、いい提案には実現の方策をたて、点検とはげましの電話をいれる。たったこれだけのことで実績はあげていくことができる。ただ人生のある時期

を犠牲にしさえすれば。

民主主義の基本、言論の自由・情報の公開（とりわけ少数者のために）を実現するのにいかに苦勞しただろう。ある連盟員や僕を、反民主主義者ときめつけて反論もせずに連盟をやめていった人たちがいる。

蔭ではいろいろ意見を言うのに、会議では言わない人がいる。僕は世間知らずだから、これがあたりまえなのかもしれない。だとしたら、世間を壊そう。（君にレモンの爆弾をひとつ渡す。）

君のおかあさんは、僕の本格的な闘争を見ることはなかった。彼女には地味な実務ばかり頼んでしまった。アメリカで拳銃の射撃訓練にもつれていかなかったし、砂漠をどこまでも車で走る移動訓練もしなかった。

君のおかあさんの家はたぶん貧乏な農家で、彼女はおばあさん子だった。勉強のできる子で家事はなにも教えてもらってなかったと思う。当初は僕の方が料理がうまかったぐらいだ。冷蔵庫の残り物を考えずに買い物をしてた。あたえられた仕事はてきぱきこなすけれども、企画を立てたり作戦をたてて仕事をすすめる人ではなかった。

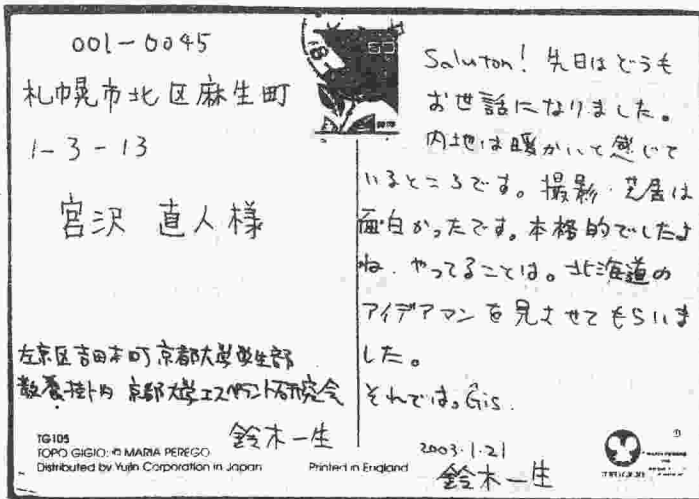
僕はずいぶんつまらないことで君のおかあさんに小言をいったけれども、はじめて暴力を振ったのは彼女がださいジャージを着ていたときだ。以前から僕は文句を言っていたけれど、その時僕はビリビリにジャージを破った。君のおかあさんは、時々すばらしくかわいらしい顔をする。札幌のゲイパレードに参加したときや夏子の結婚式に僕ら三人で出席したとき、君のおかあさんはとてもすてきな格好をしていたのだよ。

外山恒一も僕も、フェミニストがというような暴力が問題なのではない。お互いの神経症に気がつくのが遅すぎたのだ。君のおかあさんが職場の人間関係で神経症になったとき、あくまでも緊急避難として退職をすすめた。本当は相手の上司の方が重症だったように思う。君のおかあさんは人を怒らせてしまう名人だ。君は「コンションのママ」といつも言っていた。これからもおかあさんを大事にしてほしい。

いつのころか僕が新しいおもちゃを持ってくると、君は大喜びで聞くようになった。「買ったの？もらったの？」僕が拾ったんだよと答えると変な顔をしていた。とったり、ひろったり、つくったりして遊ぶのが本当は大切なのだ。君のおかあさんは、折り紙で恐竜や新幹線をつくったし、ペットボトルで君の大好きなロケットを作ってくれただろう。

最後に僕の父、つまり君がなむなむと拝んでいた写真の人について言うておこう。ある時、彼の務める定時制高校の校長先生が先生達に訓示した。「教師たる者みだしなみをととのえて教壇に立つべきである。明日から全員ネクタイを着用するように。」僕の父はまじめな人だったからそれまでネクタイをして教えていた。訓示の日から彼はネクタイの着用をやめた。（君はその彼の孫だ。）

君にいつかこの手紙がとどくことをねがいつつ。



↑ 新年講習会のときに来た日本青年エスペラント連絡会の鈴木一生さんからの葉書

憧れのイギリス行きがかなった
 ロック音楽の好きな鈴木一生さんは、
 たちまち日本食に飢えてしまいました。
 その時の思索が Esp への道を開いたのでした。上が彼の編集している会誌です。↑

第4回 HEL 委員会報告

2003年3月1日(土) 17:30より札幌市北区ロンデタージョにて

前回の委員会以後、3名の新入会員があった。「中里基金」で2本の連盟旗を新調した。

「基金」の残金は約10万円。HPアクセス数24515。メルマガ最新は54号(2/14)で964部発行。道内の大本信者数百名にエスペラント学習用プリントが配られていると報告。5月合宿は大本エスペラント普及会北海支部と共催に。今年はウラジオで学生大会がある年(隔年)なので、極東ロシア訪問団を送るにあたって、論文・人員の検討。次回委員会は5月合宿のなかでおこなう。

第4回委員会からの呼びかけ「戦争に反対する決議」を以下の文案で可決した。

REZOLUCIO KONTRAŬ MILITMINACO

Sapporo. 2003.03.01

Refoje milito estas okazigota. Ni scias, ke la viktimoj estos ne nur batalantoj, sed ankaŭ multaj civitanoj inklude infanojn, se la milito komenciĝos.

Hokkajda Esperanto-Ligo alvokas, ke pac-amantaj esperantistoj partoprenu en agadoj kontraŭ milito, premi la registarojn de Japanio kaj la koncernaj ŝtatoj tiel, ke ili ĉesigu sian politikon por la milito.

Por paco kaj demokrata komunikado tutmonda!

La 4-a Komitata Kunsido de Hokkajda Esperanto-Ligo

戦争に反対する決議

ふたたび戦争が起こされようとしている。

戦争が開始されれば戦闘員のみならず、子供を含む多くの市民が犠牲となることを我々は知っている。

北海道エスペラント連盟は、平和を愛するエスペランチストが戦争反対の行動に参加し、日本政府そして当該国の政府に対して戦争政策をとりやめるよう圧力をかけることを呼びかける。

平和と世界のコミュニケーションの民主主義を求めて。

2003年3月1日

北海道エスペラント連盟 第4回委員会 星田 淳 後藤 義治 セルゲイ・アニケーエフ
宮沢 直人 樺山 裕介 佐藤 不二雄 横山 裕之

北海道エスペラント連盟機関誌 Heroldo de HEL 第95号 2003年3月30日発行

編集・樺山 裕介 〒076-0024 富良野市幸町 2-20-A ファクシ 0167-23-5772

kabaty@fa3.so-net.ne.jp 投稿を待っています。